

巡礼地クレアとサクロ・モンテの建造・変遷
—特に礼拝堂装飾に着目して—

The Sanctuary of Crea and Construction History of its Sacro Monte
—Paying Particular Attention to the Decoration of Chapels—

関根 浩子
Hiroko SEKINE

崇城大学芸術学部美術学科教授

Professor, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

キーワード：巡礼地、クレア、サクロ・モンテ、建設経緯、礼拝堂装飾

Keywords: Sanctuary, Crea, Sacro Monte, Construction History, Chapels Decoration

Summery

The Sacro Monte of Crea, located in the Serralunga di Crea in the province of Alessandria in Piedmont, is one of the Sacri Monti built in northwestern Italy during the Counter-Reformation. It was listed as one of the “Sacri Monti in Piedmont and Lombardy”, along with eight other Sacri Monti, as a UNESCO World Heritage Site. In Japan, although Sacro Monte of Crea has been mentioned somewhat in books and papers, it has not yet been sufficiently introduced or studied.

Therefore, in this paper, looking at future research, based on previous researches, we tried to grasp the overall image of the Sanctuary of Crea and its Sacro Monte, especially the painters and sculptors involved in the decoration of chapels as follows.

First, Chapter 1 gives an overview of the creation and subsequent development of the Sanctuary of Crea, which precedes Sacro Monte, and Chapter 2 also outlines the history of land acquisition for Sacro Monte, which also precedes the construction of Sacro Monte. Chapter 3 provides an overview of the changes in the pilgrimage courses and chapels since the decision to build Sacro Monte in the late 16th century, with a particular focus on the artists involved in the decoration of chapels.

はじめに

現在の行政区分ではピエモンテ州アレッサンドリア県セッラルンガ・ディ・クレアに位置付けられるクレアのサクロ・モンテ（図2、5）は、対抗宗教改革期に北西イタリアに建造されたサクロ・モンテ群のひとつであり、その重要性から2003年に「ピエモンテ州とロンバルディア州のサクリ・モンティ」のひとつとして他の8つのサクロ・モンテ群とともにユネスコの世界文化遺産に登録された。

クレアのサクロ・モンテは、長い歴史のあるマリアの巡礼地に1589年に建造が開始されて以来、当初の方針は幾度か変更された。具体的には、対抗宗教改革時代に当たっていた当初の方針は、マリアの生涯を知るための玄義の森の建造であったが、17世紀にはモンフェッラートの貴族たちのキリスト教的敬虔^{ピエタス}のためのモニュメントとなった。続いて19世紀初頭にはフランス政府による修道会の弾圧のため、土地全体が農業と植林用地に変えられた。しかし、同世紀半ば以降、カゾルツォの司教地方代理で修道祭式者会士フェリーチェ・バヴァが組織した団体によってクレアの文化遺産の主要部分が再統合され、修復が開始された。この段階でサクロ・モンテは、列をなすロザリオで聖母マリアを称讃するための「ヴィア・サクラ」に変えられた。また、封建領主一族やラテラノ修道祭式者会士たちによる支配後、後を継いだフランシスコ会オブセルヴァント派（1820～1992年）によって修道院が再建され、再びクレアに対する地域住民の信仰が回復された。しか

し1980年にはこの山はピエモンテ州に委ねられ自然公園（Parco naturale e area attrezzata del Sacro Monte di Crea）となって、1992年にはオブセルヴァント派の小さき兄弟会士たちが山を去った。現在は、この巡礼地の典礼儀式はカザーレ教区の司祭によって直接管轄されている。

クレアのサクロ・モンテは以上のような北西イタリアの歴史上、宗教史上重要な意味をもった遺構であるが、日本では書籍や論考中に挙げて言及はされてきたものの、未だ十分に紹介や研究はなされてはいない。そこで本稿では、原典である古文獻等には当たっていないものの、今後の研究を見据え、先行研究に拠りながら、巡礼地クレアとサクロ・モンテの全体像の把握、とくに礼拝堂装飾に携わった画家や彫刻家の全体的把握を以下のような展開で試みたい。

まず1章では、サクロ・モンテ建造に先行する巡礼地クレアの生成とその後の展開について、続いて2章では同様にサクロ・モンテ建造に先行する建造用地獲得の歴史について概観する。そして3章において、16世紀末のサクロ・モンテの建造決定以降の巡礼コースや礼拝堂群の変遷を、特に礼拝堂装飾に携わった芸術家等に注目しながら概観する。

1 巡礼地クレア—先行して存在した教会堂・修道院の展開

1-1 巡礼地クレアの起源

最古の記録が9世紀に遡るクレアの巡礼地の少なくとも千年以上の歴史の中では、

サクロ・モンテはローマ教会と地域住民の期待に同調する形で最後の4世紀に登場するに過ぎない。この場所は元来、山を目的地とする上昇的巡礼に利用されており、山の麓には洗礼、浄化のための水が湧き、その頂上には教会堂内に聖エウセビウスが齎したとの伝承がある聖像（イコン）（図3）が置かれていた。その基本概念は、上述の最古の記録として有名な不詳の伝記作者による『聖エウセビウスの生涯』⁽¹⁾中に既に明瞭に示されている。

このように、対抗宗教改革的カノンに則って16世紀末にマリアの生涯のミステリー（玄義）を表現する礼拝堂群が建造される前から、山上の教会はラテラノ修道祭式者会に管理されており、この山は教会堂内に置かれた木彫の聖母子像を中心とするマリア信仰の対象となっていた。この教会堂は少なくとも12世紀に始まるもので、モンフェッラート侯爵たちの庇護下にあった。しかし、クレアという土地の名称（Credonensium）も初出する9世紀の手稿（Archivio Capitoriale Vercellese 所蔵）のテキストは、中世初期とするその教会堂の存在を最終的に早め、信仰の場としての創設を、ヴェルチェッリの最初の司教である聖エウセビウスが生きた4世紀とすることを可能とさせる。同伝記に拠れば、ヴェルチェッリの最初の司教聖エウセビウスは、迫害を逃れるためにポー川を渡ってヴェルチェッリからクレアにやってきて身を潜め、同地でキリストの福音を手で書き写し、聖母を讃える小さなオラトリオを建てたという。そしてこの小堂がマリアの巡礼地の核となり、時の経過とともに重要性を

増していくことになる。因みに、同聖人が東方からの帰還に際して携えたと伝承されるマリア像が3体あるが、そのうちの1体がクレア（その他の2体はオローバとカリアリにある）で今も崇敬されている上述の聖母子像（図3）であることは言うまでもない。

4世紀から9世紀までの絶対的な史料の欠如の後、アルプス山麓の様子が多少とも明らかになるのはイヴレア辺境伯でイタリア王ともなったアルドゥイーノ（在位955頃～1015年）が登場する10世紀末から11世紀初めにかけてのことで、彼の息子のオットーネが11世紀初めにクレアの教会堂を建造したとする説もある⁽²⁾。しかし、クレアの教会堂が重要となったことを示す確実な史料は、同所がヴェッツォラーノの修道祭式者会の管轄下に入った12世紀まで下らなければならない。

史料の沈黙は教会堂の建築的証拠とも合致している。教会堂に残る遺構のうち9世紀の建造作業を偲ばせるのは質の高い石彫のわずかな断片だけであり、壁面に至っては当時を回想できるものは何もない。堂内に残るその他の彫刻はロマネスク末期、すなわち12世紀後半頃の様相を呈しているのである。

1-2 修道院のための封土の寄進

今日、教会堂の識別可能な壁面のうち最古のものは13世紀と14世紀前半に遡るものである。それらと合致する時期に、1176年以来ヴェッツォラーノの修道祭式者会に委ねられていたクレアの修道院長は、モンフェッラート侯国の侯爵から重要な寄進

(1233年)を受けて封土権を固め、それをセツラルンガの聖エウストルジヨ(1316～17年)やポンテストゥーラの聖アガタの聖遺物に対しても拡大適用した。さらに14世紀初めには、アスティ方面の山の尾根全体もモンフェッラート侯国の防衛にとって戦略上重要な役割を帯びていた。それゆえパレオロゴ家のテオドロ1世(在位1306～1338年)は、伝統的に侯国の首都であったキヴァツソでよりも、近くのモンカルヴォで政務を遂行した。アウグスチノ会士フルゲンツィオ・アルギーズィ⁽³⁾によれば、教会堂の聖マルゲリータ礼拝堂はその世紀の後半に遡るものであるが、この礼拝堂はキリスト教の建築的伝統には例をみない形で内陣^{カーボクローチエ}のアプシス空間を聖母の礼拝堂と2分している。聖マルゲリータ崇敬は、パレオロゴ家の侯爵のうちのひとりが聖母に対する崇敬に加えたものであるが、伝承ではオットーネ3世(セコンドット、在位1372～1378年)の妻に関係している。しかしそれ以上に、この聖女の足の遺物箱がクレアにあることや、同家の2人の侯爵(テオドロ2世とジョヴァンニ4世)のマルゲリータという名前の女性との結婚に基づいている⁽⁴⁾。その遺物箱は同家の侯爵のいずれかによってこの教会堂に寄進されたコンスタンティノーブル請来の6世紀の貴重な金工品である。しかしアルギーズィ以外、その聖遺物のモンフェッラートへの到着や、クレアへの寄進について記している者はいない。

1-3 修道院管理者としてのラテラノ修道祭式者会

1468年、パレオロゴ家のモンフェッラート侯爵グリエルモ8世(図4)は、当時没落していたヴェッツォラーノ出身の修道祭式者会士からクレアの修道院の管理の役割を取り去ったため、同会士は山を下り、マリアのしもべ修道会士で侯爵の主任司祭であったトビア・デイ・ペッラーティ師が管理人としてそこに留まった。そして2年後の1470年には、クレアの修道院長になれるよう修道祭式者会士となっていたトビア師が予定通り修道院長となった。因みに1477年10月16日のシクストゥス4世の勅書によれば、クレアの教会堂はマリアのしもべ修道会に譲渡されている。また同年10月25日の同教皇の勅書からは、グリエルモ8世が具体的な刷新事業を要求していたことが推測される。それらの事業における侯爵の片腕となったのは先のトビア師で、彼は、上述の通り、多くの役職を経験した宗教家(まずヴェッツォラーノの修道祭式者会士、次いでマリアのしもべ修道会士、再びラテラノ修道祭式者会士)であり、とりわけ政治家、宮廷人であった。彼は、修道院長がヴェッツォラーノ出身の修道祭式者会士からラテラノ修道祭式者会士へと移行する不明瞭な時期(1477～1483年)における不変の存在であり、また、この教会堂の重要な建築工事の管理者でもあった。それらの工事には、回廊の南面の工事や教会堂を西に3スパン拡大した工事などがあったが、詳細は不詳である。いずれにしても、15世紀の諸々の改築工事はグリエルモ侯爵の依頼によるものであったし、クレアの修道院長の拡大された役割は、そうした諸工事の後、ラテラノ修道祭

式者会の管理に委ねられた。管理者として同会が選ばれたのは偶然ではなく、そこには優れた運営への願いが込められていたと考えられる。同教団はまだ改革されたばかりで、新しい会則が示した保証によって、まさに同世紀の後半以降多くの教団から信頼を得ていくからである。

これに続くクレアの建造物の発展は、1589年にマッシーノがカルデローナの丘上で推進したサクロ・モンテ建造の結果であった。その発議の成功は、1608年におけるクレアのラテラノ修道祭式者会の共住団体に対する^{アッパツィーア}大修道院の称号の許可と、その結果としての教会堂と修道院の同称号への適合という形で実を結んでいく。

2 サクロ・モンテ建造までの経緯

2-1 封建領主による封土（サクロ・モンテ建造用地）の寄進

ところで、サクロ・モンテ建造のための用地はどのように得られたのであろうか。

この地域は歴史にはヴェルチェッリの司教やモンフェッラート侯国（Marchese del Monferrato, 961～1574年）の侯爵領として登場している。そして時代が移り行く中で、後者が完全に前者にとって代わった。1152年にはサンタ・マリア・ディ・クレア教会堂はまだ^{イン・カストロ・クレドネンシ}要塞の内部にあった。約70年後の1223年に、クレアに近いカルデローナの丘の頂上に何らかの建物の設置が証言されているが、そこはまさしく16世紀末にサクロ・モンテが建設されることになる場所であった。この山には中世に疑いなく人が住む集落があったが、特定でき

ない時期（14～15世紀の間）にその集落は姿を消し、16世紀後半には山上は教会堂と修道院、農家、カルデローナ城の残骸だけとなっていた。しかしこの山は、モンフェッラート侯国を治めていたパレオロゴ家が侯国の首都カザーレ同様にクレアを見守り、民衆の信心をも惹起させたため、16世紀前半には多くの信徒の巡礼の目的地として繁栄していた。

そして1560年に、まず、クレアやカルデローナ、セッラルンガに対する封土権を有していたガビアーノの領主たちが、礼拝堂群の建造用地としてカルデローナの^{デ・フェウド・カストリ}要塞^{・クレテ・カルデローナ}化された封土である約12ブッシェル半の森（約半ヘクタール）をラテラノ修道祭式者会に提供した。また、彼らに続いて1591年には、デッラ・サーラの領主たちがカルデローナ城の塔と遺構（城壁の痕跡は16世紀末にはまだ見られた）があった3ユゲルム半の森を同会に提供した。このように封建領主たちがこの見捨てられた土地の管理を放棄した一方で、クレアの修道院長たちはそれらを所有し続け、さらにモンフェッラートの公爵（モンフェッラートは1574年以降侯国から公国となった）の好意で、フォルネッリオとセッラルンガの一部に対しても封土権を拡大しさえした。こうした16世紀半ば以降の絶えざる獲得工作により、修道院による同山の所有は強固になっていった。

2-2 サクロ・モンテの創設意図とその後の構想の変遷

以上のような寄進と土地の獲得工作により、サクロ・モンテを建造するための用地

は確保されていたが、その後サクロ・モンテはどのように具現されていったのだろうか。

サクロ・モンテの構想者が、ラテラノ修道祭式者会神父でクレアの修道院長（在任1580～90年、1594年）に任命されたコスタンティーノ・マッシーノであったことは周知の事実である。彼の著書『モンフェッラート公国に設置されたクレアのサクロ・モンテにおける太古からの信仰について』（1590年）⁽⁵⁾の序文からは、霊的な熱気が高まったために山の様々な場所に礼拝堂を建てて聖母マリアの生涯と天の偉大な元后である彼女の死を表現する、という表向きの建造理由が理解される。しかし1589年における彼のサクロ・モンテの建造決定の真の意図は必ずしも明瞭ではない。彼の意図が、カルロ・ボッロメオが変容させたヴァラッロの聖なるエルサレムに啓発されたことや、トレント公会議後のカトリックの対抗宗教改革的態勢や命令とも関係していることは容易に想定されるが、当時の北イタリアにおけるモンフェッラート公国の微妙な政治的立ち位置や地理的位置、カザーレでの事件を考慮するならば、この山の要塞がもっていた力強い戦闘機能とも切り離すことはできない⁽⁶⁾。マッシーノに対して公爵家がサクロ・モンテ建造を許可した直後、後述するように、公爵自身の出資で大プロジェクトに含まれる一つの最もモニュメンタルな礼拝堂（現V堂）が最初に建造され、教会堂に対面する最も重要な場所に配されたことは、後者の理由と無関係ではないように思われる。

いずれにしても、マッシーノ院長が示し

たプロジェクトでは、巡礼コースに沿って15の礼拝堂（1玄義につき1堂）が予定されていた。そしてそのコースは教会堂から出発し、森を北東方向に登って山の頂上に至り、次いで南側の斜面を下って教会堂に戻るといったものであった。しかし実際に具現されたのはわずかで、現在の第1、第2、第4、第5、第8、第19、第23堂がそれらに当たっている。これらの礼拝堂群の神学的部分はマッシーノが指揮したが、都市工学的、建築工学的部分は不詳の技術者が指揮した。

続いて1598年には、当時の修道院長トーマーズ・ピオラット（在任1596年、1598～1600年）と彫刻家ジョヴァンニ・タバケットティが、ヴァラッロの壮大さを凌ごうと、マッシーノの15の玄義にその他の重要なエピソードを含めた40堂からなる新プロジェクトを公表した。先行のプロジェクトにおける公爵の参加が、モンフェッラートの封建領主たちに他の礼拝堂を支援させるのに役立ったとすれば、この新しいプロジェクトの壮大さは、地域住民の参加も必要とするものであった。クレアの作業場は、地元や他地域の職人（特にルガーノの左官や石工）が常住する形で開かれ、彼らに不断の仕事を提供し、それはモンフェッラートで戦争が始まる1612年まで続いた。

戦争は、1612年から1698年まで17世紀一杯続いた。その間、平和時には破壊された部分が修復され、建造が再開された。サクロ・モンテは幾度となく軍隊や不法侵入者による破壊に遭い、彫刻は壊され壁画は掻き消された。礼拝堂は荒廃して崩れ落ち

たものもあれば、入念に修復されたものもあった。しかし一度として40堂になったことはなく、18世紀初めにはこのサクロ・モンテの初期の構想は消え失せていた。修道祭式者会士パオロ・アンドレオツィと国家書記官ジャチント・サレッタによるそれぞれ1683、1711年の記録⁽⁷⁾によれば、この山の小道は、取り壊されてもはや言及されていない礼拝堂群や山崩れといった障害物を明らかに避けながら、蛇行して進む恰好になっていた。他方で、ジョヴァンニ・スカピッタが描いた1703年の素描には、上述の2人が言及していない建物や廃墟の存在が見られる。ゆるやかではあるものの、その後もサクロ・モンテの破壊は続き、18世紀末のフランス政府による修道会の弾圧に至って著しく加速された。そしてその土地と建造物はまるごと国有地とされた後、今度は多くの私有地に区分された。また、教会堂の備品はことごとく剥奪され、修道院や農場も大部分破壊された。そして山は植林場と化した。

1820年以降、ようやく修繕の時代に入り、当時カザーレ司教(1846~67年)であったルイジ・ナザリ・ディ・カラビアーナが創設した「ソチエタ・デイ・レスタウリ」(修復協会)のお蔭で、クレアの総体の再建作業が開始された。修道祭式者会士バヴァと後任の同会員グレゴリオ・クローヴァは、同協会の飽くなき推進者であった。サクロ・モンテ全体や教会堂、修道院、隣接する農地は買い戻されて寄進され、カザーレの司教管区資産となった。宗教儀式は既述のように残った修道院に住み始めたピエモンテ管区の小さき兄弟会士に

委ねられた。その修道院も現在の形に再建され、全礼拝堂の修復が開始された。

さらに1887年には、この山の「かたつむりの道」を「ヴィア・サクラ」に変えるという司教カラビアーナのプロジェクトによって特別な刺激も与えられた。このヴィア・サクラの実現のために、礼拝堂内にあった彫刻群による小劇場の多くが破壊され、新しい主題に関係する像に交換された。しかし同時に打ち捨てられていた礼拝堂が救われ、多くの古い彫刻や壁画が修復されもした。

3. サクロ・モンテ・ディ・クレアの巡礼コースと礼拝堂群並び堂内装飾

次に、クレアのサクロ・モンテがもつ巡礼地としての特徴、続いて現在サクロ・モンテを構成している礼拝堂群を中心に、それぞれの礼拝堂の構想者や建造時期、後援者、またどのような芸術家が礼拝堂装飾に携わったかを見ていくことにする(表1参照)。

3-1 サクロ・モンテがもつ巡礼地としての特徴

サクロ・モンテ・ディ・クレアは、16世紀末に建造されたその他の類似のサクロ・モンテ群と同様に、宗教的変容と黙想の場として、地域の民衆のためばかりではなく、当初の建造費並びにその維持を義務付けられた富裕な階級をも対象に建造された。

16世紀末に、ミラノの大司教カルロ・

ボッロメオがミラノからはるばるヴァラッロやトリノ（聖骸布崇敬のため）まで徒歩で巡礼し、断食や祈りを行って模範を示したことで、君主や貴族らの競争意識は真摯な宗教心の表明という形で表面化していった。

このような中で、サクロ・モンテ・ディ・クレアが、元来は車の接近が不可能な交通の不便な場所に建造されたことは偶然ではない。マドンニーナの平原からフォルネッリオを経て徒歩で山頂まで至る困難な登山は、巡礼者の心を世間の喧騒から遠ざけるのに必要であり、また、最初の礼拝堂に湧き出る水が浄化と歩みの糧の両方の役割を負っていたことは明らかである。礼拝堂群が建造される前に修道院長マッシーノが出版した1590年の既掲の案内書は、教養ある読者に向けた信仰を深めるためのサクロ・モンテの利用上の手引きを含んでおり、聖なる玄義の森の中の曲がりくねった険しい細道パラディーンに沿って、山の頂上の「天国」の礼拝堂まで読者を誘っている。

以下、巡礼の行程（図5）を見ていくが、コースはこの巡礼地の歴史に関する聖エウセビウスの礼拝堂から始まっている。

3-2 礼拝堂の建造と室内装飾

Ⅰ 堂「聖エウセビウスの殉教」

Ⅰ堂は変則の礼拝堂（図6）であり、サクロ・モンテ創設直後に建造された。そこには天然の泉が湧き登山者の休憩所となっていたが、その泉は研究者によって、礼拝コースの礼拝堂群の建造やサンタ・マリア

教会堂の創設に先行する山の聖化の源と捉え直されている。かなり大きい礼拝堂であるのは、それが三つの役割を帯びていたからである。ヴェルチェッリの最初の司教の殉教場面を示す四角い空間は上階の床面より低い位置（かつては井戸）に設けられ、2階式の回廊がそれに横付けされた恰好であった。現在閉鎖されている下階は休憩所として建てられたもので、壁2面に石製の椅子が置かれていた。また、道路側が開いている回廊は神秘の泉（19世紀初めまで岩から泉が湧出）を取り囲んでいた。上階の回廊にも19世紀の改築時のセメントによる痕跡が見られるが、現在まで残った4つの柱頭と石製の基部は15世紀半ばのものである。背後にある上述の四角い部屋の彫刻と絵画による豊かな装飾、並びに礼拝堂は、アリウス主義者の石打によるエウセビウスの殉教を記念するため、16世紀の最後の10年間にヴェルチェッリのコムーネが資金を注いで完成させたものである。壁画の作者はグリエルモ・カッチャ（以下通称の「モンカルヴォ」を使用）、テラコッタ像はジョヴァンニ・デ・ウエスパン（通称タバケッティ）にアトリビュートされている。この場面の表現は、ヴァラッロのガウデンツィオの作品を手本としており、壁画による平面の人物像と立体による三次元の人物像とが効果的に融合されている。また、ヴァラッロでもそうであったように、場面は当世風、つまり人物の衣装は4世紀のそれではなく、16世紀当時のヴェルチェッリの現実を示唆している。

16世紀にG. タバケッティが制作したテラコッタ像は断片化され、1859年にジュ

ゼッペ・ラティーニ神父、1935年にカザレ出身の彫刻家グイド・カプラによって修復、補完がなされた。壁画も、良好な箇所は剥がされ、幾度も塗り直しや補筆がなされたが、ヴェルチェッリの都市の表現は識別可能である。再建されたヴォールトには何も描かれていない。

1815年、1859～65年、1903年、1933～35年に大規模な修復が実施された。しかし1977年には蛮行によって多くのテラコッタ像がバラバラにされた。1979年には扉、1980～1981年には外部の排水や窓の修復、壁画の修復が行われた。

II 堂「聖エウセビウスの休息」

I 堂の後、上り坂に沿って進んでいくと、右側に、森に通じる上りの細道の端が目に入る。この細道は司教エウセビウスが石を割って開いた当初の苦行の名残を留める険しい浄化の道であるが、II 堂はまさにこの細道の登り口付近にある。同堂は、1590年にマッシーノが信徒への休憩所の提供と、ここに聖母像を齎して370年小礼拝堂を建てた聖エウセビウスの歩みの軌跡を信徒に回想させることを目的に建造された。そしてタバケッティ兄弟による彫刻とモンカルヴォ（あるいはジョルジョ・アルベリーニ）による壁画で堂内が装飾された。1612年にはこの道は一度に一人しか通れないほど狭く、また前方にポーチが確認されていた。しかし、この古い礼拝堂は19世紀半ばには荒れ果て、同世紀末に基礎から再建されてラティーニ神父による新しい彫刻像とマルティーニ・デイ・ロベッラによる壁画で装飾し直された。その際、

タバケッティ兄弟とモンカルヴォあるいはアルベリーニが当初展開した聖エウセビウスの休息の主題が再び採用されたが、幾つか変更もなされた。建築は全体的に古い構造を維持してはいるが、採光は限定されポーチも失われた。

同堂は1860～66年に修道院長ジュニペーロから譲渡され屋根やラティーニによる彫刻、マルティーニの壁画が手直しされたが、ポーチは再建されなかった。1951年には同堂に至るための細道が拡張された。土塁や屋根、外壁の漆喰の修繕、床や入口の扉の交換、壁画と彫刻の修復は1981年に実施された。

III 堂「予示されたマリア」

(当初はアダムとエバの創造)

巡礼の道は元来、II 堂から直接巡礼聖堂に通じていたが、サクロ・モンテ着工後間もなく荷車や自動車用の近代的な道が建設された。この後者の道を進むと、右側に司令塔のように配された円形プランのIII 堂の麓に至る。この礼拝堂は旧約で予示されたマリアに献堂されているが、その献堂は近代のことで、かつての主題は「アダムとエバの創造」であった。同堂の建造は、16世紀末頃、モンカルヴォの共同体が費用を負担したが、その布施ではまったく足りず、長いこと未完のままであった。最終的に、城の新しい監督者で隊長でもあったジョルジョ・テナーリアが罰を受けて同地に送られた際、過去の過ちを償って再び公爵の寵愛を得、また住民の同情を得ようと、1630年頃私費を投じてこの礼拝堂の建設と堂内装飾を完成させた。因みに、堂

内のアダムとエバの創造の場面の背景には騎乗のテナーリア像も表現されており、完成以来、彼の名で知られるようになった。テナーリア隊長のこの礼拝堂も、完全な放置の後、1864年に正規修道祭式者会員ゴーリア・ディ・ポンテストゥーラが購入するところとなって献堂名が変えられ、フランチェスコ・ボッキの設計で改築された。また、彫刻と絵画による堂内装飾も改めて行われた。同作業時に無原罪の御宿りの石膏像の祭壇の両側に6体の預言者像も配されたが、それらはモッラ・ディ・グラッツァーノによる19世紀の最後の20年間の作品である。

IV堂「聖アンナの MARIA 懐妊」

このIV堂をもって山上への到着が告げられる。この礼拝堂(図7)は1598年の内に建造された初期の礼拝堂群のうちのひとつで、屋根に2つの明り窓と前方に小ポーチがついていたが、それらは現在は失われている。

IV堂は、他の礼拝堂群とは異なり、ひとりの寡婦が幼い息子の運命を聖母に委ねるために建造資金を提供したものであった。彼女はサルティラーナの伯爵夫人で、自身の憂慮を礼拝堂の中央の3体、つまり左側に彼女自身、右側に故人の夫と息子の像に固定させた。これらの像のうち、伯爵夫妻像は祭壇の方を向き、子供の像は観者ないしは未来を見つめている。同堂の主題の図像は、奥の祭壇とクーポラの壁画に展開されている。祭壇は、浅浮彫の彩色テラコッタで制作されたこのジャンルにおける数少ない優れた現存作例のひとつである。

聖なる場面を囲む額縁は、意匠の点でも彩色の点でも同時代のロンバルディアの木製祭壇を模しており、地図の額縁と同様、中央の場面に関係する土地や建造物を示している。例えば、下方に見えるのはサント・セポルクロのクーポラが聳えるエルサレムの眺めで、高所には天球を示す太陽と月が表現され、その天界から神の手が伸びて4人の人物を祝福している。これらが表現しているのは、同堂の献堂対象であるミステーロ、すなわちエルサレムの金門でのヨアキムとアンナの出会い、そしてアンナによるマリアの懐胎である。

彫刻像も1598年に制作され、作者はジョヴァンニ・タバケッティが想定されている。また、1598年当初の壁画はモンカルヴォによって描かれたものであったが、それらのうち現在まで残っているのはドラムとクーポラ部分、そして1992年夏に祭壇の背後に発見された森の風景のみである。

1756年、1815年には、同堂の後援者であったガッティナーラ家の費用で一貫した工事が実施され、1815年の工事では壁面のオリジナルの装飾は一部ピエル・ジュゼッペ・チーマによる絵画に変えられ、彫刻も修復された。1982年には屋根、1983年には発注者の群像が修復され、新しい扉も付けられた。1992年には堂内の漆喰が取り除かれ、扉と木製格子のメンテナンスも実施された。

V堂「マリアの誕生」

この礼拝堂(図8)は、「マリアの誕生」に献堂されてはいるが、実際にはマン

トヴァとモンフェッラート公国（1574～1708年）の公爵となったヴィンチェンツォ・ゴンザーガ（在位 1587～1612年）が、同地に対するゴンザーガ家の支配（モンフェッラートのパレオロゴ家時代の侯爵やゴンザーガ家はこの巡礼地に対する布教保護権保持者でもあった）と、同家のイニシアティブへの賛同の印として、1593年の内に建造させたものであった。ゴンザーガ公はこの仕事によって封建領主や公国の諸共同体に手本を示し、マッシーノが示した礼拝プロジェクト全体の実現のために資金を提供させようとしたのである。

この「公爵の礼拝堂」は、1589年におけるサクロ・モンテ創設の直後に開始され、最初に完成された。同堂は形態や面積、また諸々のマリアの祝祭日に多くの信徒を収容しなければならなかった広場を挟んで教会堂と向かい合うという特権的な位置の点で最も重要な礼拝堂であった。

この建物は、前方に階段が付けられ、堂内は2つの空間に分けられている。最初の部屋は正方形で、屋根に高いドラムに支えられた八角形のクーポラと小さなランタンが載っている。2番目の部屋は矩形で、まさに劇場の舞台のように構成されている。マリアの誕生の場面は祭壇背後の高い壇上で展開されている。この設計は、モンフェッラート公爵のお抱え技師ジョヴァンニ・フランチェスコ・バロニーノによるもので、あまり注目されてはいないものの、その質は高く、サクロ・モンテ全体の設計者を彼に帰す指摘もある。

彫刻群は、メルキオーレ・デンリーコとクリストフォロ・プレスティナーリといっ

た、当時ヴァラッロやミラノ大聖堂の現場で活躍していたロンバルディア地方の彫刻家が1593年に制作したものである。一方、壁画と彫刻の彩色は、近年評価されるに至ったモンカルヴォが同年に手掛けたものである。

修復作業の経費を負担したのは支配者一族で、最初はゴンザーガ家、1717年には代わってサヴォイア家が修復を実施した。1636年にポーチが建造された後、クーポラの上方部分（1681年）とそれに対応する壁画が制作し直された。室内の壁面装飾とモンカルヴォが描いた旧約の場面は、1683年にヴェーリア・ディ・アステイによって制作し直された。

大理石の祭壇は1859年、階段は20世紀のものである。また当初の群像の配置を留めているのは一部にすぎない。というのも、1920年代の工事で背景が新しくされた際、幾体かが置き換えられたからである。1981年には屋根と軒、小クーポラが修繕された。1989年には壁画、1992年には祭壇、窓枠が修復された。

VI 堂「マリアの神殿奉献」

「公爵の礼拝堂」の右側から、ラテラノ修道祭式者会の最後の院長ヴィンチェンツォ・ベルベリス（1790～98年）が手掛けた「環状道路」が始まるが、ここで出会う最初の礼拝堂がVI堂（図9）である。

同堂は「マリアの神殿奉献」に献じられ、早くも1598年には建造されて、マントヴァのダルコ家（17世紀初めにモンフェッラートの長官を幾人か輩出）の援助を受けていた。そして堂内には当初タバ

ケッティ兄弟（ジョヴァンニとニコラ）に帰される彫刻が配され、モンカルヴォによって壁画も描かれていた。しかし、1814年に修復が行われ、この機会に古い彫刻がヴァラッロ・デイ・モンカルヴォの現在の作品と交換された。また1845～64年にかけて、この礼拝堂はコミッシオーネ・レスタウリによって修繕され、その際下方の壁画が塗り直され、祭壇も簡素化された。1983年には壁画と彫刻が修復され、1987年には外部に排水設備が敷かれた。また1992年には外壁の漆喰が除去された。

現在の礼拝堂は、外観は八角形、内部は円形となっている。またクーポラと壁体は、彫刻が現出する場面の空間を暗示するため壁画で覆われている。壁体に描かれたエルサレムの神殿の中庭を示唆する2本1組の柱と格間天上のある環状アーケードは、基部から父なる神と雲間に小天使が住む天空へと巡礼者を誘っている。そして17世紀の衣装を身に付けたロンバルディアの地方画家の手になる壁画の人物たちの前方に、上述のヴァラッロ・デイ・モンカルヴォが制作した司祭や幼いマリア、聖ヨアキム、聖アンナの彫刻像が配されている。

VII 堂「マリアの結婚」

この礼拝堂（図10）は伝統的に、カンディア・ロメッリーナの住民らの資金で16世紀末に建造されたと見做されている⁽⁸⁾。岸壁の狭い整地上に建つこの礼拝堂は、両側に小さな内陣を備えており、19世紀までは前方に前室があった。

堂内には壁画による優美な建築表現が現

存しており、主要な建築空間と二次的な建築空間、また示唆的な建築空間が美しい旋律を奏でている。上方は、アルベリーニとその他のモンカルヴォ周辺⁽⁹⁾の画家が16世紀末に描いた父なる神と天使が住む定型のクーポラになっている。下方のアーキヴォールトの下では、貝装飾と巻紙装飾が井戸の傍らに立つエレアザルとレベッカを表現した華麗なテラコッタの祭壇を縁取っている。この祭壇は、IV堂の祭壇を制作したロンバルディアの作家の手になる。また、塑像群にはこのミステーロに関係する幾つかの場面（ヨセフの選出や苛立って膝で棒を折る落選者、司祭を前にした真の典礼の瞬間、婚礼の祝宴に招かれた歌人の一群）が統合されている。

壁画の前に配された彫刻群は、同様に、タバケッティ兄弟かプレスティナーリ兄弟に帰される16世紀末の作品であったが、中央の3体の一部と他の全ての人物像の下方部分は、19世紀半ば頃にラティーニ神父によって作り直されている。

19世紀半ばのクローヴァの修復信徒会による全体的な修復に続いて、記録には残されていないその他の修復も行われた。近年では、1979～80年に修道院長ブルネッティにより、彫刻の矯正と壁画の洗浄が実施された。

VIII 堂「受胎告知」

巡礼路の奥で直方体のような姿を見せているこの礼拝堂（図11）は、1592年に建造が決定されたものの、その工事と堂内装飾はアレッサンドリアの共同体の費用で1594～1599年に実施された。同堂も1853

年以降、前室を失った。

内部空間は角が丸みを帯びており、そこに彫刻と壁画が適切に位置付けられている。同堂の主題は、天使と跪くマリアのわずか2体と、西壁に添えられた鳩（聖霊）によって表現されている。そして他の壁面には、マリアの勇気に対応する旧約の予型、すなわち祭壇の浮彫にホロフェルネスを殺害するユーディットの無謀さ、東壁にクセルクセスを前にユダヤの民を守るエステルが絵画で表現されている。ユダヤ教徒とキリスト教徒の救済者である3人が創造主の意図に組み込まれていることは、祭壇の上方に父なる神や天使、奏楽者が配され、四隅の壁龕中の福音書記者らがそれらの出来事を歴史に記していることから分かる。

同堂では、他の土地以上に、16世紀末のサクロ・モンテ群の職人として知られる芸術家たちの総合的な仕事の成果が見られる。雲間に天使のいる定型のヴォールトはカザーレ出身のアルベリーニに帰されるが、壁面の壁画はイル・フィアミンギーノ（ミラノ出身のジョヴァンニ・バッティスタ・デッラ・ローヴェレ）の作品とされる。彫刻の制作者は議論の対象となっているが、一般には、父なる神と奏楽の天使がジョヴァンニ・タバケッティ、天使像と聖母像がニコラ・タバケッティ、4人の福音書記者がデンリーコ兄弟のうちのいずれか、そして祭壇（美しい人像柱はIV堂とVII堂の祭壇を偲ばせる）が不詳の彫刻家に帰されている。因みに祭壇のユーディットとアブラの頭部は1853年頃にラティーニ神父によって作り直されている。

管理は18世紀末までアレクサンドリアの共同体が行い、1853年にはアレクサンドリア出身のグロペッコが修復を行った。1859年以降は修復委員会が管理するコミッショナーネ・レスタウリの管理下に入った。その他の修復は、1890年（ビストルフィ？）と1917年（絵画的補筆）に記録がある。1981～83年には、扉や格子、絵画、彫刻の修復、外部の漆喰と正面の床の修繕が行われた。

IX堂「マリアのエリサベツ訪問」

IX堂は、森への上り始めに出くわす最初の礼拝堂（図12）であるが、エリサベツが住むアイン・カレムがエルサレムへ通じる隊商路上の地形的に類似した位置にあるため、この場所の選択は偶然ではない可能性もある。

当時モンフェッラートの支配者であったファビオ・ゴンザーガ公爵の費用で1598年に着工されたため、同堂は修道院長マッシーノの当初の計画中に含まれていたと考えられる。礼拝堂のプランは正方形で、かつては前室が付き、全体的にジョヴァンニ・タバケッティ⁽¹⁰⁾の彫刻とモンカルヴォのフレスコ技法による壁画で装飾され、ヨセフとザカリアの見守る中でのマリアと従姉のエリサベツとの邂逅が表現されていた。

しかし壁画の方は、17世紀末にA.ヴェーリア・ディ・アスティによって一部描き直され、モンカルヴォのオリジナルの部分はヴォールトの低層に残るにすぎない。また、彫刻群も18世紀に革命によって大きな被害（1850年⁽¹¹⁾）までは床上に残

骸が残っていた)を被り、1859年にはこの礼拝堂は彫刻を欠いて「がらん堂」になってしまった。その後コッシオーネ・レスタウリがそれを再構築し、1866年⁽¹²⁾までにラティーニ修道院長が制作した新しい彫刻像を再設置した。

1886年には、パオロ・マッジ・デイ・サンナツァーロ・デ・ブルゴンディがフランチェスコ・ニコラの新しい枠取りの中に再び壁画を手掛けた。続いて山の再建者である修道祭式者会士グレゴリオ・クローヴァ(1879年没)修道院長と後任のジュゼッペ・ブッシ(1888年没)修道院長の墓が同堂に設けられた。さらに1934年には建物と彫刻が修復され、1979年には土塁や屋根、排水、漆喰、扉が作り直された。近年では1984年に絵画が修復され、1989年にも彫刻並びに床、床木の修繕が行われた。

X 堂「イエスの誕生」

(当初は「聖ヨセフの夢」)

X 堂は、17世紀初めにガスバルド・ネ・ディ・カザーレ家のオノーリオとアントニオ兄弟の出資で建造され、1969年まではあったポーチは今は失われているが、当初の矩形プランのまま、現在の堂内のグロッタの背後の奥壁に半円形の壁龕がひとつ付いている。同堂は元来、「聖ヨセフの夢」に献堂されていたもので、18世紀まではタバケッティのわずか3体の彫刻とモンカルヴォの壁画によって同ミステーロが表現されていた。しかし1817年には、ポーチ上のファサードの壁画装飾だけが記録に留められているにすぎなくなってい

た。

1862年以降は、この礼拝堂を3番目の喜びの玄義である「イエスの誕生」に変えることを意図した司教カラビアーナの構想に基づいて、修道院長クローヴァと後任のブッシの指揮下で、現在の献堂名に変えられ、堂内の木と藁の小屋の中にはラティーニ神父が新主題に合わせて制作した彫刻が配された。因みに現存する初期の壁画のうち、剥がされたエリトレアのシュビラとマントーネの聖ベルナルドの部分は現在教会堂内のサンタ・マリア・マッダレーナ礼拝堂内にある。

続いて1890～1902年の間に、小屋の代わりに岩を穿ったグロッタがつくられ、フランチェスコ・ニコラとパオロ・マッジが描いたベツレヘムの町を背景として、ブリッラとデ・デイが追加で制作したその他の彫刻も配された。

1970年には壁体、また1980年には彫刻がそれぞれ矯正、修復された。

XI 堂「イエスの神殿奉献」

(当初は「キリストの誕生」)

この礼拝堂(図13)は、アルタヴィッラの司祭ポンポニオ・ビリアーニの費用で1598年までに建造されており、マッシーノ修道院長の計画に従って具現された限られた礼拝堂に属していた。礼拝堂は前廊の付いた矩形プランで、現在は閉じられているものの、奥壁は祭室となっていた。そして元来は「キリストの誕生」に献堂され、タバケッティ兄弟の彫刻を備え、祭室上にモンカルヴォの手になる小屋が表現されていた。

その後19世紀半ばには、同堂は放置された状態となっており、彫刻はなく、壁画も掻き落とされていた。そして1886年⁽¹³⁾には司教カラビアーナが新しいヴィア・サクラに適應させるべく、同堂を第4の喜びの玄義「キリストの神殿奉献」に改変した。フランチェスコ・ニコラの手になる建築と神殿の扉の描写の前で、アントニオ・ブリッラが制作し直した彫刻像の司祭シメオンと預言者アンナが割礼の儀式のためキリストを受け取っている。因みにシメオン像には作者自身の面影が反映されているとされる。また前景では、割礼の儀式時に納める鳩を手にしたラティーニ神父制作のヨセフ像とマリア像が奉納者のようなポーズをとっている。ヴォールトの天使と壁体の人物像はアルベリーニの手を思わせるが、マジッによって完全に描き直されたものである。また、壁体の装飾や建築描写はフランチェスコ・ニコラの手になる。

1937年に彫刻の補強、次いで1979年に礼拝堂の修繕が行われた。

XII 堂 「神殿での博士たちとの問答」

(当初は「羊飼いの礼拝」?)

XI 堂の後、巡礼コースはカルデローナの古い居住地域であった平坦な地区に至り、矩形プランの、XII 堂に至る。この細道は過去には XII、XIII 堂の東側の、これら2堂とこの地域の要塞の間を走っていたが、19世紀に2堂のファサードは西側に置かれ、それぞれの前方に小ポーチが付けられた。この礼拝堂は19世紀半ばには壁体しか残っておらず、元来は別の主題「羊飼いたちの礼拝」に献堂されていた可能性が

指摘されている。

1881年には重い病の床から回復したカラビアーナ司教の願いで、ここに新たに5番目の喜びの玄義である「神殿での博士たちとの問答」を表現するため礼拝堂が建造された。そしてサヴォーナ出身のブリッラの彫刻と、先行の場面のうち残っていた2体の彫刻が統合された。諸像の背後にはアゴスティーノ・カイローニによって遠近法で効果的に建築も描かれた。

1932年にはあまり厳密ではない修復が行われ、1935年には蛮行によって壊された彫刻の補強が、G. カプラによって実施された。建物の修復と扉のメンテナンスはそれぞれ1979年、1986年に行われた。

XIII 堂 ゲツセマネの園での祈り

(当初は「12人のシビュラ」)

この矩形プランの礼拝堂は修道院の費用で建造され、当初はシビュラたちに献堂され、入口も現在壁になっている東側にあった。そして堂内には、マリアにキリストの誕生を預言する箇所が開かれた本を手にする12人のシビュラが表現されるとともに、中央には異教の偶像が置かれ、上方にはティブルのシビュラの預言を受けた皇帝から崇敬される聖母が浮彫で表現されていた。

しかし、この礼拝堂もカラビアーナ司教によるヴィア・サクラ計画によって1887年にかなり変形され、ブリッラの彫刻とカイローニの壁画で新たに装飾された。夜の場面の主人公は跪くキリストと天使であり、これらに森の樹木と背景のエルサレムの町、弟子たちが眠りこけている場所に到

着した松明を持つユダと兵士が添えられている。

1982年に厳密さを欠く壁作り作業が行われた後、1986年に扉が修復された。

XIV堂 答刑

(当初の主題は不詳)

17世紀の巡礼コースは、XIII堂の先の森の中にある石標の辺りから、かなり前に失われた2つの礼拝堂(「シビュラたち」と「キリストの洗礼」)を抜けて頂上にある天国の礼拝堂へ向かっていたが、近代の巡礼コースは答刑に捧げられたXIV堂の方に下っている。

XIV堂は、19世紀に新たに建造されたものと考えられてきたが、背後の描き絵による壁龕上方のヴォールトの接合部にモンカルヴォの神と天使像が見出されたため、少なくとも建物に関してはサクロ・モンテの初期に遡ることが明らかとなった。そして同堂を失われた「キリストの洗礼」の礼拝堂と見做す者は多いが、確実な証拠はなく、詳細は依然として不詳である。

いずれにしても現在の同堂の主題は、カラビアーナ司教が望んだヴィア・サクラの2番目の苦しみの玄義「答刑」となっている。堂内の6体の彫刻は1886年にブリッラが制作(背中を向けた人物は、損壊した像の代わりにG.カブラが1935年に制作)し始めたものであるが、1887年になっても彩色はまだ完了されていなかった。壁画は、フランチェスコ・ニコラが建築的部分、ベルガモ出身のボンツィアーノ・ロヴェリーニが人物像を担当して完成させた。

1979年に建物の修繕作業が開始される一方、1992年には床と塑像群が修復された。

XV堂 荊冠

(当初は「聖家族のエジプトからの帰還」)

XV堂(図15)は、1605~1609年に、奇跡的に溺死を免れたパヴィーアの貴族アルフォンソ・ダ・コルテのエックス・ヴォートとして建造されたもので、楕円形プランと小ランタンの付いたクーポラの屋根、前方のポーチといった最古の礼拝堂群に特徴的な要素を備えている。従って建物は全体的にオリジナル(ポーチは1886年に改築)であるに違いない。そして堂内には当初、4体の彫刻と背後の壁体の後陣部分に集中して描かれた風景によって、「聖家族のエジプトからの帰還」が表現されていた。しかしこの場面は1886年の改築以降、1991年の再発見まで塗り込められていた。

現在見られる「荊冠」の場面は、1886年にブリッラが制作した彫刻と、同年にニコラが描いた建築的透視図法による定型の背景画によって表現されている。表現主義的なブリッラの彫刻群は、その後湿気によって著しくダメージを受け、1935年にカブラによる修復を受けた。

1953年には蛮行に対する修繕が実施された、1971年には外部の溝が修繕された。1991~1992年にも壁画と彫刻、床が修復、修繕された。

XVI堂「カルヴァリオへの道行き」

この礼拝堂（図16）は、ヴィツラノーヴァの伯爵夫人エレオノーラ・ロツジェリの費用、C.カゼッリの設計で、1887～1889年に新たに建造され、「カルヴァリオへの道行き」（4番目の苦しみの玄義）に献堂されたもので、屋根には小さなランタンが載り、前方には革新的な3スパンの前室が付いている。そして堂内には、ゆったりとした空間の長辺に沿って、カザーレのレオナルド・ビストルフィが構想した列をなす絶望した多くの人々の彫刻像による透視図法的表現が展開されている。新築もしくは改築された礼拝堂群の中で、この礼拝堂は、芸術性の高さとはかなり異なった視覚概念に基づく構想の点で際立っている。他の礼拝堂では、聖なる場面は観者を巻き込むが、ここでは象徴的空間が完全に踏台と祭壇の背後にあるため、観者は排除される。凝った色彩と幾何学的構図による壁画装飾はジョヴァンニ・グラッシによるものである。また、この礼拝堂は最古の礼拝堂の彫刻群とは異なり、制作者が同定できる点でも特異である。つまりアリマタヤのヨセフ像はビストルフィ自身、岩にもたれかかった女性像は彼の妻、岩に腰かけた少年像は彼の息子、そしてローマ兵の背後に配されている人物像は左官のメルレッティの肖像となっているのである。

1969年に建築の修繕、1980年に溝と外部の漆喰の修繕が実施された。また1981～1982年には扉の修復、並びに彫刻と壁画の洗浄、補強が行われた。

XVII 堂「カナの婚宴」

この区間の巡礼コース中では、同堂は

17世紀の最初の数十年間に制作された当初の装飾と配列を留める唯一の礼拝堂（図17）で、プランは方形で前廊を備えている。扱われている主題の制作は、16世紀の最後の10年間に遡るが、彫刻群の複雑さが原因で着手が遅れ、完成はさらに遅れた。

礼拝堂の建設費用については、モンフェッラートの封土家たちに委ねるとするラテラノ修道祭式者会士らの16世紀末の証言が残されているが、結局カザーレの伯爵トライアーノ・コルバー人の負担で建造された。しかし同堂の後援者は、その後ポルターバヴァ・ディ・モンテウ・ダ・ポ、次いでブロンデッリ・ディ・ブロンデッロへと移っていく。

当初の壁画はモンカルヴォかアルペリーニ、彫刻はタバケッティ兄弟によって制作されたが、彫刻の一部はあまり芸術的才能のない他の作家によっても制作されている。従って装飾作業は、ジョヴァンニ・タバケッティがクレアを去る1605年以前に開始されたものの、それ以後も続いていたと推測され、それはコルバ家が1623年に残した同堂のその他の彫刻と金彩色に関する信頼に足る証言からも裏付けられる。

母親の希望でキリストが水を葡萄酒に変えた婚宴の様子は、17世紀のモンフェッラートの2人の貴族の婚礼⁽¹⁴⁾として、当時の衣装と当時の慣習に従って高価な布で壁を豊かに「装飾した」部屋の内部に示されている。因みにテーブルの右端の2人の男性像は、制作者タバケッティ兄弟自身の肖像彫刻とされている。食器棚や水差し、大きな甕なども16世紀末当時のものを再

現している。18世紀中頃に幾体かの彫刻が作り直されたが、特にキリストとマリアの胸像部分は凡庸な彫刻家ヴァラッロ・ディ・モンカルヴォによってこの時制作し直されたものである。特に像の下方部分は湿気が原因で早くも19世紀に取り壊されている。

祭壇や食堂、前景のテーブルクロスレースは20世紀初めの修復の産物である。奥壁の2天使をあしらった柱と柱の間の彩色テラコッタによるイコンには、透視図法で描かれた建築を背景に高浮彫で、息子が帰還した際にトビアとサラが催した祝宴が表現されている。さらにヴォールトの巻紙装飾間の4つのメダイ内のその他の旧約聖書の祝宴もメインの祝宴と反響し合っている。

1930～1979年にも幾体かの彫刻が全体的に作り直された。また壁画も同時期に塗り直され接合された。1992年には将来の修復を見据えた彫刻と壁画の現状調査・分析が実施された。

XVIII 堂「磔刑」

(当初は「聖ヨセフの昇天」)

山の西面の巡礼コースはXVIII堂(図18)で締め括られる。このXVIII堂に関する最古の証言はジョヴァンニ・バッティスタ・スカピッタの景観図(1714年)が提供してくれる。しかし17、18世紀の案内書⁽¹⁵⁾の記述中に同堂は含まれていないため、18世紀にはこの礼拝堂は既に放置されていたに違いない。いずれにしても同堂の主題は、1817年のテーマ⁽¹⁶⁾による記述等によれば、当初は「聖ヨセフの昇天」で

あり、寝台に横たわった聖ヨセフの傍らにイエスとマリアが配され、高所には父なる神と天使、雲が表現されていた。

1887年に修道祭式者会士ブッシはこの建物を修復させ、前廊を西に置き、5番目の苦しみの玄義「磔刑」に関係する新しい室内装飾を設えさせた。そしてブリッラにカルヴァリオ上に置く彫刻群(1887～1888年)、また、カイローニ⁽¹⁷⁾にキリストの死によってエルサレムの上方で暗くなった天や、十字架の背後の赤い光とエルサレムの神殿に当たる稲光の黄色い光線からなる背景のフレスコ画を依頼した。十字架の下にはマグダラのマリア、左にはマリアと敬虔な婦人、キリストと2人の盗人のうちの1人との間に伝統的な「デーシス」の配列に従って聖ヨハネ、そして右側にアリマタアのヨセフが配されている。なお、「善き盗人」像は1935年にカブラによって作り直されたものである。

1953年には蛮行によって壊された彫刻の修復がカブラによって実施された。1979年には建物の補強、1980年には屋根の改築が行われた。

XIX 堂「キリストの復活」

(当初は「十字架降下」)

XVIII堂から先は、細道は上りとなり、セメントと大理石をたたき合わせて1940年代に敷かれた舗床がXIX堂の小広場まで訪問者を誘っている。現在の礼拝堂は、改築の産物である変則的な二重のファサードをもっているが、正規の資格で地位についた最も権威あるモンフェッラートの封権領主の一人、ガイド・ピアンドラーテ・

ディ・サン・ジョルジョの資金で1598年までに建造されたものであった。そして堂内には、タバケッティが制作した膝にイエスを抱いた聖母と、2人の傍らにアリマタヤのヨセフとニコデモ、少し離れた所に敬虔な婦人たちとヨハネ像が置かれていた。また壁にはカルヴァリオへ上るイエスもしくは卒倒の聖母、アーチ上には2人の預言者、アプシスには3本の十字架が描かれていた。この建物には、その他、南側に前廊が付き、東側にもジョヴァンニ・バッティスタ・ダ・ルッカ神父が建てたイエスの墓と聖母を表現した小部屋が付いていた。

ガイド・ビアンドラーテの子孫は、1680年にも、戦争による破壊箇所を修繕するため、同堂に多額の資金を提供している。この建物の上層はおそらくこの時に造られたと考えられ、2つになったヴォールトは現在ファザードからも識別可能である。

1888年から1892年にかけては、前廊と東側の小部屋が取り去られ、建物の主要部分が修復された。そして新しい主題である「キリストの復活」の図像のために、彫刻と壁画が制作し直された。彫刻はブリッラ、下層の3つのスペッキアトゥーラの壁画はルイジ・モルガーリの作品である。より古い壁画は、ヴォールトや壁の下部、モルガーリが描いたファザード裏の壁面の内層に残っている。この玄義の中心人物である復活したキリストは、彫刻としては表現されておらず、敬虔な婦人たちと天使だけが悲しげに中央の空の石棺を見つめている。しかし復活したキリストの姿は、時間的に先に起こった事として右壁に描かれている。因みに左壁には、ガラリア湖で会話

中のイエスが予型として表現されている。

1980年には屋根や外壁の漆喰が修繕された。また、1985年には彫刻と絵画が修復され、舗床の整備も進められた。1992年には壁体の装飾も修復された。

XX堂「キリストの昇天」

再び上りの細道を進み、カルデローナの古い城門の敷居を跨ぐと、キリストの昇天に献じられたXX堂に至る。それは小さな円堂で、半球形のクーポラが載っているが、建造年代は不詳である。また建造費の負担者についても、リヴォルノ・フェッラーリス村とする記述やカザーレのマグレッシ伯爵家とする記述、あるいは後者が前者を引き継いだとする見解がある⁽¹⁸⁾。

同堂は放置によるダメージが大きく、19世紀初めには壁体しか残っていなかった。そこで修道祭式者会士の指揮下で、1888年にマッジによって壁体に壁画が描かれ、1889年にはブリッラによって新し彫刻が制作、設置された。しかし現在の12体の彫刻のうち、ブリッラの作品はおそらく2体（マリア像と貝殻を付けた巡礼者もしくは聖ロッコ）だけで、その他の像は1921年の修復時に修道士エルゼアリオ（あるいはエルグラヴィオ）によって修繕されるか一部作り直されている。

壁体自体は1911年に修繕され、1953年には蛮行による被害に対して修復が行われた。続いて1971～79年には建物の外側が修繕され、1985年には扉が交換された。

XXI堂「聖霊降臨」

この礼拝堂はマッシーノの当初の計画に

含まれていたものの、パヴィーアの貴族出身でモンフェッラート公国の官吏であったジョヴァンニ・バッティスタ・デッラ・ピエトラと同堂の建設について検討していたラテラノ修道祭式者会士らの配慮の下で、1604年に建造された。

1612年には、同堂は早くもヴォールトが載った方形プランで前方にポーチのある現在の形になったが、この時まではモンカルヴォかアルベリーニに帰されるヴォールトや壁体の壁画は残っていた。この礼拝堂は、寛大な注文主のお陰でクレアのサクロ・モンテの中でも最も大きな礼拝堂のうちのひとつであり、日々の礼拝用祭壇も備えていた。また18世紀初めの図によれば、この礼拝堂は採光のために装飾的な天窗を備えていたし、祭壇上の低浮彫によるテラコッタのイコンは、この場面の透視図像における焦点となっていたが、やがてカザーレのコツィオ・ディ・サラブエ伯爵の後援下に移り、フランス支配下で甚大な被害を被った。そして1817年には、同堂を飾っていた多くの彫刻のうち手つかずと記録されたのは、わずかに2体だけとなっていた。

1850年頃には、この礼拝堂の後援者が彫刻家カミッロ・モッラ・ディ・グラツァーノに移り、彼によって彫刻に対する最初の修復や壁画の描き直しが行われた。

1888年には同堂はソチエタ・ディ・レスタウロ（修復協会）の管理するところとなり、間もなく当初の主題と図像の継続を目的として大規模な復元が開始された。そして1889年には新しい彫刻がブリッラによって完成された。また、単純な建築構造

が手の込んだ金欄のタピストリー描写を四角形に縁取っている壁体や、雲間に小天使と放射状の光を背景とした聖霊の鳩がいる中央に穴のない定型のヴォールトの壁画もマッジによって修復、補彩された。1920年には再びポーチが付けられ、さらに1979年には外部の修繕もなされた。

XXII 堂「マリアの昇天」

この礼拝堂の確実な消息は、修道祭式者会士ブッシが指揮していたコミッシオーネ・レスタウリがロザリオの19番目の留として方形プランで同堂を新たに建造した1887年まで下らなければならない。そして2年後の1889年にブリッラによって彼の最後の作品となる彫刻が制作された。その後彼は、「マリアの昇天」部分を白いままにしてサヴォーナに戻り同地で没してしまった。「マリアの昇天」図像の下方に通常表現されるべき「マリアの永眠」、すなわち昇天するマリア自身の足元に配される彼女の亡骸の表現が欠けているため、請け負った仕事自体も未完であったと推測されている⁽¹⁹⁾。

1939年に特定できない異例のメンテナンスが実施され、1980年には屋根や土塁、下水溝が作り直された。さらに翌1981年には扉と窓が交換された。

XXIII 堂「マリアの戴冠」(天国)

修道院長マッシーノが1590年モンフェッラートの信徒たちに提示したマリアの生涯の玄義に対する黙想は、この山の頂上の天界における「マリアの戴冠」の称場で締め括られる。通称「天国の礼拝堂」と

呼ばれる XXIII 堂 (図 20) は、ラテラノ修道祭者会士らによって 16 世紀の最後の 10 年間に、塔 (通称悪魔の塔) だけが残っていたカルデローナ城の廃虚 (図 1) の上に、部分的に城の下部構造を利用して建造された。その後同堂はセッラルンガのブロンデッリ・ディ・ブロンデッロ伯爵の後援下に移ったが、1880 年には同伯爵からサンチュアリオに寄進された。

この建物は 2 階式の円堂で、クーポラが載り、上階の周囲には回廊がめぐらされている。上階の設計は、1565 年に G. アレッシがヴァラッロの礼拝堂のために設計したものと酷似し、さらに 1592 年に建造されたオルタの第 15 堂の設計図や、17 世紀後半にオローパで具現された昇天の聖母マリアの礼拝堂の設計図を想起させる⁽²⁰⁾ が、このような構造の礼拝堂の普及は、対抗宗教改革的文化や、特にボッロメオの関係者たちが再評価した初期キリスト教時代の象徴天文学的価値に関係しているように思われる。さらにクレアでは、下層の空洞を死 (か地獄) の暗い洞窟、そして上層の空洞を復活 (か天) の洞窟と考えていた古代の 2 層式の墓の象徴主義を復活させているように思われる⁽²¹⁾。マッシーノの神学的参照がどのようなようであったかを明らかにできないが、いずれにしても 1612 年には、同堂の下方の「地獄」の空間用に「冒瀆」、「肉欲」、「傲慢」の 3 体の寓意像が制作されていた。他方、上層の空間には、天国へのマリアの昇天が並外れて豊かな彫刻群によって早くも表現されていた。1598 年には建物は完成されており、1604 年には画家フェデリコ・ツッカーが、同所で粘

土による作品を準備しようとしていた「2 人のフランドル出身彫刻家とひとりのミラノ出身者」について書き記している。2 人のフランドル出身者は疑いなくデ・ヴェスパン兄弟、すなわちタバケッティ兄弟のジョヴァンニとニコラであった。しかしミラノ出身者については、パオロ・ジョヴェノーネやモンカルヴォ、ジョヴァンニ・デンリーコ、プレスティナーリ家のうちの誰かとする見解に分かれている⁽²²⁾。

その後は数多くの芸術家たちがこの群像のために制作を行なったが、予定された 300 体という彫刻の数は、多大な出費と時間を要求した。また、1612 年から 1698 年まで戦争がモンフェッラートを苦しめ、このような戦時には同堂はクレアにおける物見櫓とされた。従ってこの時期の設置に帰されるのは、上層の輪の人物像と第 2 層の輪の幾体か、そして中央の戴冠の群像の下方にいるヴォールトに吊るされた天使群だけであった。その他の像は 18 世紀にストウッコ (漆喰) で制作されたものであるが、特に下層の雲の輪に座した凡庸なストウッコによる聖人像はすべて 18 世紀後半の制作になる⁽²³⁾。

構造全体の修復は、ピエモンテ州文化財評議会とトリノの貯蓄銀行 (カッサ・ディ・リスパルミオ) の費用で、トリノの文化財保護局の指揮と協力の下、1994 年にほぼ完了し、中央の群像の複雑な固定システムが強化され、人物像の輝かしい彩色も回復された。

ところで、上方の並外れて豊かな天国の表現の下方には壁画のない壁体と 19 世紀製作の貧相な祭壇しかない。その理由につ

いては、この礼拝堂が未完成であったか、下方の装飾部分が破壊されたという仮説が成り立つ。ラテラノ修道祭式者会士ミケル・アンジェロ・クルテッラ・デイ・リヴォルノ神父は1612年に下方における地獄表現の意向に言及していたが、上述のように同年にはわずか3体しか存在しておらず、1683年にはラテラノ修道祭式者会士でクレアの修道院にもいたパオロ・アンドレオツィがそこには何もなかったと記している以上、後者の仮説の方が妥当ということになるであろう。

2つの外階段については、同じアンドレオツィが彼の時代に既に両階段が存在したことを証言しており、スカピッタの平面図（1703年）もそれを確証しているが、階段が2つ設けられた理由としては、当時は異なったレベルで2つの行程が同所で交差していたことや、同所の礼拝堂の下方に地獄の場面を設置しようとしていたことが挙げられる⁽²⁴⁾。

さらに回廊が付いた階を高くして2階式にした理由としては、信仰の印として平野からも見えるようにするためという建築技術的理由が考えられるが、16世紀末に小さなモンフェラート侯国が置かれていた隣国や侯国内の諸都市との政治上、地理上の微妙な関係も影響していることは間違いない。

南に位置するモンカルヴォはモンフェラートの主要な都市の中でも強力な都市であり、他方ではすでにピエモンテの都市になってアスティと境界を接していた。また西側の平野では、キヴァツォかサヴォイア家とトリノの手中にあった。つまりモン

フェラートは周囲から威嚇された状態にあり、クレアの古城の場所はこの地域全体にとって並外れて重要な戦略上の塔、物見櫓となっていたのである。従ってサクロ・モンテ建造に対してモンフェラート侯爵が高い関心を示したことは驚くべきことではないし、カルデローナの封土を譲渡して天国の礼拝堂を建造させたことも驚くに値しない⁽²⁵⁾。

隠者の小礼拝堂

マリアの生涯の玄義の行程を終えると、巡礼者は山の東脇の細道を抜けて教会堂の広場に戻ってきていたが、ここにはさまざまに時代、多様な隠者や聖人の小礼拝堂が龕が建造されていた。17世紀末のアンドレオツィの時代には17堂あったが、1890年には10堂を超える程度になり、1902年には2堂になってしまっていた。今日、この道は、XVIII堂「磔刑」までは逆に辿り、XVIII堂からは広場の大ヴォールドに向けて下らなければならない。このように辿ると、聖ロッコや聖アレッシオ、聖フランチェスコ（当初は聖カルロ）、聖ルカ、苦しみの聖母（アッドロラータ）に献じられた5つの小礼拝堂を見ることができ、これら5堂のうち、苦しみの聖母の小礼拝堂はオリジナルの塑像と壁画を今なお留めている唯一の御堂である。彫刻はミケーレ・プレスティナーリかデンリーコ兄弟のうちのひとりの手になるもので、壁画はモンカルヴォによって描かれている。

おわりに

以上、今後の研究を見据えて、先行研究に拠りながら、巡礼地クレアとサクロ・モンテの全体像の把握を試み、まず1章では、サクロ・モンテ建造に先行する巡礼地クレアの生成とその後の展開について概観した。その結果、巡礼地クレアは、伝承の時代を含めれば、聖エウセビウスが彫刻像（イコン）を携えて同地を訪れ山上に小礼拝堂を建てた4世紀にすら遡る古い歴史をもち、その後も、史料を欠いて明確に跡付けられない時代が続くものの存続を続け、封建領主たちから土地の寄進を受けながら、少なくとも12世紀には山上に巡礼者の目的地でありマリア信仰の拠点である教会堂や管理者となる修道院が建造されていたことが分かった。

続いて2章ではサクロ・モンテ建造に先立つ建造用地獲得の流れを概観し、サクロ・モンテが中世の城跡に建造されたものであることや、その土地が封建領主たちの寄進や修道士たちの不断の獲得工作の結果得られたものであること、そしてそれには当時の北イタリアの政情が複雑に関係していたことを示唆した。次いでそこに16世紀末の宗教・政治事情を反映する形でサクロ・モンテの建造が決定され、長い建造と放置、再建の歴史が開始されたことを跡付けた。

最後に3章では、クレアのサクロ・モンテを構成している現在の礼拝堂群を中心に、それぞれの礼拝堂の構想者や後援者、建造時期や放置期、倒壊・再建の有無、修繕といった基本的事項、また特に礼拝堂内

の装飾に当たった彫刻家（すべて塑造家）や画家が誰であったのかを概観した（表1参照）。その結果、クレアのサクロ・モンテのマッシーノによる1589年時の構想（15堂によってマリアの生涯と死を表現）はその後2回、まず9年後の1598年という早い段階で、当時の修道院長ピオラットとG. タバケッティによってその他のエピソードを含む40堂に変えられたことや、長い放置や軍隊・不法侵入者による破壊後の再建期（1820年以降）に、司教カラビアーナの決断により、原則的にロザリオの玄義の表現を辿るコースになるよう軌道修正されたことが明らかとなった。また、当然ながら、以上のプロジェクトに連動して礼拝堂内の装飾が行われ、初期には彫刻家としてはタバケッティ兄弟やデンリーコ兄弟、プレスティナーリ家といったヴァラッロやミラノでも活躍した作家、画家としてはモンカルヴォやアルベリーニなどが活躍し、19世紀後半の再建期には彫刻家としてはラティーニ神父やブリッラ、また特異なところではビストルフィ、画家としてはマッジ、ロヴェリーニ、カイローニなど地方で活躍した多様な作家が装飾に携わったことが明らかとなった。

今後は特に、初期にクレアの礼拝堂装飾に携わった作家たちと他のサクロ・モンテの礼拝堂装飾との関係を可能な限り明確にしていきたい。

【注】

- 1) "Passio vel Vita Sancti Eusebii Vercellensis Episcopi", in F. Ughelli, *Italia Sancta sive de episcopis Italiae et insularum adiacentium*, Roma

- 1652, vol. IV, coll. 1030-48. その手稿は、Attilio Castelli-Dionigi Roggero, *Un Santuario mariano: Il Sacro Monte di Crea*, Casale Monferrato, 2000, p.11 によれば Archivio Capitolare Vercellese が収蔵。
- 2) Castelli-Roggero, *op. cit.*, p. 12.
 - 3) Fulgentio Alghisi, *Il Monferrato, Historia copiosa, e Generale in due parti, et in XIII libri divisa*, manoscritto, Biblioteca del Seminario di Casale Monferrato, parte II. 同手稿の情報は Castelli-Roggero, *op. cit.*, p. 74, n. 9 に基づくもので、聖マルゲリータ礼拝堂に関する言及箇所は不明。
 - 4) Castelli-Roggero, *op. cit.*, p. 95.
 - 5) C. Massino, *Trattato dell'antichissima diuotione nel sacro monte di Opera posto nel Ducato di Monferrato*, Pavia 1590, proemio. マッシーノは同書をヴァインチェンツォ・ゴンザーガ公に献上している。
 - 6) Ermanno De Biaggi, "Il Sacro Monte di Crea", in Aa. Vv., *Sacri Monti in Piemonte*, Torino, 1994, p. 33.
 - 7) P. Andreozzi, *Compendio ristretto dell'origine della Beata Vergine di Crea in Monferrato*, Asti 1683.
 - 8) De Biaggi, *op. cit.*, p. 49 は、同地の住民の資金だけで同堂の装飾に富む建造費用のすべてを賄えたとは考えにくいとする。
 - 9) A. Barbero, S. Berti, *Guida alle cappelle del Sacro Monte di Crea*, Parco Naturale e Area Attrezzata del Sacro Monte di Crea, s. d., s. p., Cappella VII の解説は、クーポラの壁画はモンカルヴォかアルベリーニとしている。
 - 10) De Biaggi, *op. cit.*, p. 50 等ではタバケッティ兄弟とされている。
 - 11) *Ibid.*, p. 50 では1840年までとされている。
 - 12) *Ibid.*, p. 50 では1863年とあるが、Castelli-Roggero, *op. cit.*, p. 116, n. 6 に従い1866年とする。
 - 13) De Biaggi, *op. cit.*, p. 51 では1887年とある。
 - 14) 中には、この祝宴を、1604年8月に結婚したニコラ・デ・ヴェスパン(タバケッティ)とフォルネッリオの公証人の娘ドロテア・カッリガルシのものとする研究者もいる(Barbero, Berti, *op. cit.*, Cappella X VII の解説)。
 - 15) 1683年刊行の Andreozzi, *op. cit.* や、1711年執筆の手稿、G. G. Saletta, *Ducato del Monferrato tra li fiumi del Po, e Tanaro, non compresa la Provincia contenuta nel trattato di Cherasco*, manoscritto datato 1711, Archivio di Stato di Torino など。
 - 16) P. G. Cima, *Memorie storiche sul sul Sacro Monte di Crea*, Casale Monferrato, 1817.
 - 17) Castelli-Roggero, *op. cit.*, p. 162 はカイローニとしているが、De Biaggi, *op. cit.*, p. 56 はマッジ、また Barbero, Berti, *op. cit.*, XVIII 堂解説はカイローニ、マッジ、セレーナとしている。
 - 18) Castelli-Roggero, *op. cit.*, p. 174.
 - 19) *Ibid.*, p. 182.
 - 20) De Biaggi, *op. cit.*, p. 61.
 - 21) *Ibid.*, p. 61.
 - 22) Castelli-Roggero, *op. cit.*, p. 188.; De Biaggi, *op. cit.*, p. 61.; Ristampa Anastatica, Villanova Monferrato, s. d. del Francesco Negri, "Santuario di Crea, Arte e Storia nel Monferrato", in *Rivista di Storia, Arte ed Archeologia della Provincia di Alessandria e Asti*, Accademia degli Immobili, 1902, p. 57.
 - 23) De Biaggi, *op. cit.*, pp. 61-62.

24) *Ibid.*, pp. 62-63.

25) *Ibid.*, pp. 63.

【その他の参考文献】

- ・新カトリック大事典編纂委員会『新カトリック大事典 III』研究社 2002年
- ・新カトリック大事典編纂委員会『新カトリック大事典 IV』研究社 2009年
- ・新カトリック大事典編纂委員会『新カトリック大事典 総索引』研究社 2009年
- ・佐藤公美『中世イタリアの地域と国家—紛争と平和の政治社会史』京都大学学術出版会 2012年 特に第1、第2章
- ・森田哲郎編『イタリア史』世界各国史 15 山川出版社 1992年 83～128頁

【図版出典】

図1：Attilio Castelli-Dionigi Roggero, *Un Santuario mariano: Il Sacro Monte di Crea*, Casale Monferrato, 2000, p. 13.

図2～4、6～19：稿者撮影

図5：Castelli-Roggero, *op. cit.*, p.19.

図20：*Ibid.*, p. 187.

【謝辞】

本稿は、JSPS 科研費 18K00177（研究代表）の助成を受けて行った研究成果の一部である。また、礼拝堂内の写真撮影については、Ente di Gestione dei Sacri Monti の Elena De Filippis 所長から許可を頂くとともに、サクロ・モンテ・ディ・クレア勤務の同運営財団所員 Franco Andeone 氏に礼拝堂開錠のために同行頂いた。記して心より感謝申し上げる次第である。

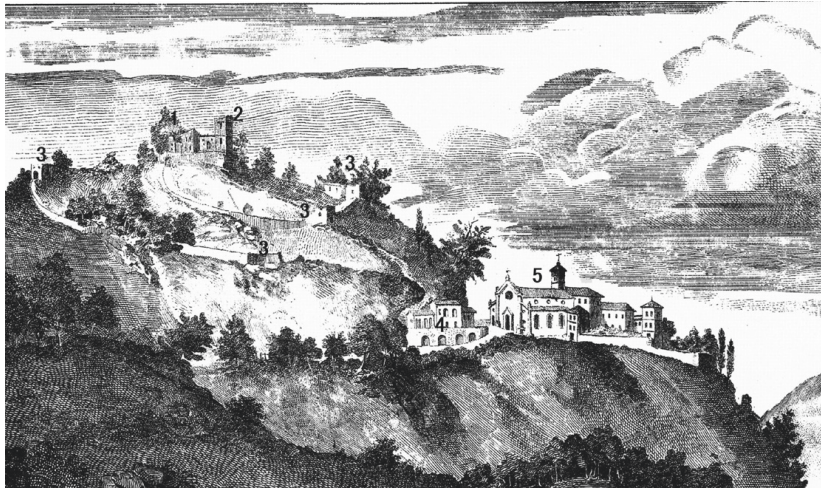


図1 1589年のクレアの眺望

1. カルデローナの城の廃墟／2. 悪魔の塔／3. 小要塞の廃墟／4. 巡礼宿／5. 教会堂と修道院



図2 南西から見た20世紀末の巡礼地クレアの眺望
(右端が教会堂)



図3 クレアの聖母像
彩色木彫 13世紀
カッペッラ・デッラ・マドンナ内
サンタ・マリア・ディ・クレア教会堂内



図4 《パレオロゴ家のグリエルモ8世と3番目の妻ベルナルダ・ディ・ブロッサの肖像》
フランチェスコ・スパンツォッティ 1474-79年
サンタ・マルゲリータ・ディ・アンティオキア礼拝堂
サンタ・マリア・ディ・クレア教会堂内

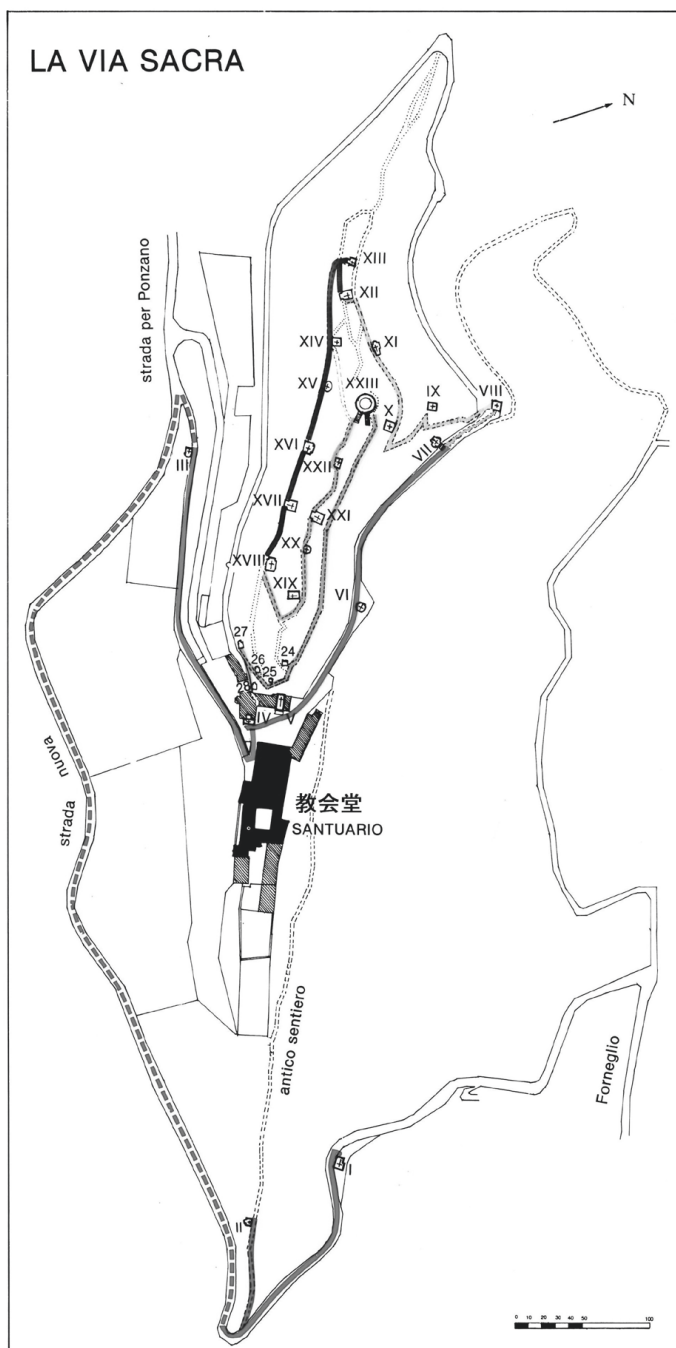


図5 現在のサクロ・モンテ・ディ・クレアの巡礼コースの概要図

(A. Castelli-D. Roggero, *Un Santuario mariano: Il Sacro Monte di Crea*, Casale Monferrato, 2000, p.19を若干加筆・修正)

聖エウセビウス回想 (I~II) 区間

- I: 聖エウセビウスの殉教、
- II: 聖エウセビウスの休息

聖書 (III~IVの手前) 区間

- III: 予示されたマリア

聖書外典 (IV~VII) 区間

- IV: 聖アンナのマリア懐妊、
- V: マリアの誕生、VI: マリアの神殿奉獻、VII: マリアの結婚

喜びの玄義 (VIII~XII) 区間

- VIII: 受胎告知、IX: マリアのエリサベツ訪問、X: イエス・キリストの誕生、XI: イエスの神殿奉獻、XII: 神殿での博士たちとの問答

苦しみの玄義 (XIII~XVIII) 区間

- XIII: 園での祈り、XIV: 答刑
- XV: 荊冠、XVI: カルヴァリオへの道行き、(XVII: カナの婚宴)、XVIII: 磔刑

栄の玄義 (XIX~XXIII) 区間

- XIX: 復活、XX: 墓からの昇天、XXI: 聖霊降臨、XXII: マリアの昇天、XXIII: 聖母マリアの戴冠

下山 (ロミトーリ) 区間

- 24: 聖アレッシオ、25: 苦しみの聖母、26: 聖ロッコ、27: 聖フランチェスコ、28: 聖ルカ



図6 I堂 聖エウセビウスの殉教

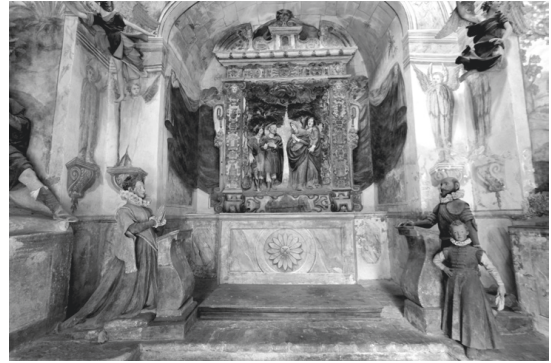


図7 IV堂 聖アンナの MARIA 懐妊



図8 V堂 MARIA の誕生



図9 VI堂 MARIA の神殿奉献



図10 VII堂 MARIA の結婚



図11 VIII堂 受胎告知



図 12 X堂 マリアのエリサベツ訪問



図 13 XI堂 イエスの神殿奉献



図 14 XIV堂 答刑



図 15 XV堂 荊冠



図 16 XVI堂 カルヴァリオへの道行き



図 17 XVII堂 カナの婚宴

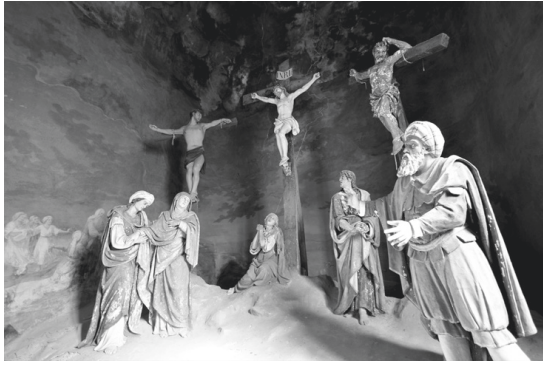


図 18 XVIII 堂 磔刑



図 19 XXI 堂 聖霊降臨



図 20 XXIII 堂 マリアの戴冠

表 1

サクロ・モンテ・ディ・クレアの礼拝堂装飾に携わった芸術家とその時期																						
礼拝堂	主題	ジャンル	作家名	制作時期	凡例：■作家の活動時期																	
					1571～1600年	1601～1650年	1651～1700年	1701～1750年	1751～1800年	1801～1850年	1851～1900年	1901～1950年	1951～1980年									
I	聖エウセビウスの殉教	壁画	モンカルヴォ (G. カッチャ)	1590～1600年頃	■																	
		彫刻	G. タバケッティ (G. デ・ウエスパン)	1590～1600年頃																		
		彫刻	G. ラティエーニ	1859年									■									
II	聖エウセビウスの休息	彫刻	G. カブラ	1953年																■		
		彫刻	タバケッティ兄弟	1590年頃～?																		
		壁画	モンカルヴォ (G. カッチャ)	1590年頃～?																		
		彫刻	G. ラティエーニ	19世紀末																		
III	予示されたマリア (当初はアダムとエバの創造)	壁画	マルティエーニ・ディ・ロベッラ	19世紀末																		
		彫刻 (石膏)	モッラ・ディ・ブルツァーノ	1880～1900年																		
IV	聖アンナのマリア懐妊	彫刻	G. タバケッティ (G. デ・ウエスパン)	1598年																		
		壁画	モンカルヴォ (G. カッチャ)	1598年																		
		壁画 (一部)	P. G. チーマ	1815年																		
V	マリアの誕生	彫刻	M. デンリーゴ、C. プレスティナーリ	1593年																		
		壁画	モンカルヴォ (G. カッチャ)	1593年																		
		壁画 (一部)	ヴェーリア・ディ・アステイ	1683年																		
VI	マリアの神殿奉獻	彫刻	タバケッティ兄弟	1598年頃																		
		壁画	モンカルヴォ (G. カッチャ)	1598年頃																		
		彫刻	ヴァラッロ・ディ・モンカルヴォ	1814年																		

